

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 7 月 29 日現在

機関番号：32507

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22730444

研究課題名(和文) 新たな2つの尺度を用いた高齢者の社会・生産的活動とウェルビーイングの縦断的研究

研究課題名(英文) Social and productive activities and scores of newly developed scales measuring activity satisfaction for the elderly in a longitudinal study

研究代表者

岡本 秀明 (OKAMOTO, Hideaki)

和洋女子大学・生活科学系・准教授

研究者番号：30438923

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円、(間接経費) 960,000円

研究成果の概要(和文)：高齢者の社会的・生産的活動の関連要因およびウェルビーイングとの関連を、縦断調査データにより検討した。ウェルビーイングの指標には、「日頃の活動満足度尺度」の得点と「社会活動に関連する過ごし方満足度尺度」の得点も加えた。多変量解析の結果、概して、社会的・生産的活動への関与は、ウェルビーイングを高めていた。社会的活動の促進要因は、年齢が若い、親しい友人・仲間の数が多い、貢献意識が高いことであった。生産的活動の促進要因は、独居ではない、貢献意識が高いことであった。また、概して、社会的活動への関与は、新たな友人や知人を獲得する確率を高めていた。

研究成果の概要(英文)：This study examined factors associated with social and productive activities, and the relationships between social and productive activities and well-being among the elderly by using panel data. Well-being was assessed by three measures: "Activity and Daily Life Satisfaction Scale for the Elderly", "Social Activities-Related Daily Life Satisfaction Scale" and "Life Satisfaction Index K" (LSIK). Multivariate analyses revealed that generally social and productive activities were positively related to well-being. Younger age, number of friends and social contribution score were positively associated with social activities. Living alone was negatively related and social contribution score was positively related to productive activities. Engagement in social activities generally was positively associated with form new relationships with friends and acquaintances.

研究分野：社会福祉学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：高齢者 社会的活動 生産的(プロダクティブな)活動 ウェルビーイング(well-being) 日頃の活動満足度尺度 社会活動に関連する過ごし方満足度尺度 縦断的研究

1. 研究開始当初の背景

高齢期が長期化し、団塊の世代が続々と高齢者層(65歳以上)の仲間入りをしているわが国では、高齢者が社会的活動および生産的活動(プロダクティブな活動; productive activities)の2つの活動(社会的・生産的活動)に参加しやすい高齢社会を構築していくことが必要である。これらの活動は、生きがいのある充実した高齢期、地域貢献、他者とのつながりづくりやつながりの維持、介護予防などの観点から重要である。

これまで、高齢者の社会的・生産的活動に関する研究が行われてきた。しかしながら、わが国では、追跡調査を実施し、縦断的調査のデータに基づいて、これらの活動に関して検討した研究が少ない。高齢者の社会的・生産的活動に関連する要因や活動への関与がウェルビーイング(well-being; 望ましい状態、より良い状態)に与える影響を、縦断的調査データに基づき、検討していく必要がある。

高齢者の社会的・生産的活動とウェルビーイングの関連について、心理的なウェルビーイング指標を用いて検討する際には、これまで、幸福な老いの程度を把握する生活満足度などの主観的幸福感と総称される尺度が主に使用されてきた。しかしながら、このような尺度は、幸福な老いの程度を把握するものであるため、生活全体やこれまでの人生についての質問項目も含んだ内容となっていることが多いこと、高齢者の社会的・生産的活動の満足度を測定するためのものではないことから、社会的・生産的活動への関与から得られた効果を把握しにくいという問題があった。

この問題に取り組むため、筆者は過去に助成を受けた科学研究費補助金(2007~2009年度; 「高齢期の過ごし方満足度尺度の開発と高齢者の社会・生産的活動の関連要因の検討」)による研究で、高齢者の社会活動などの活動の満足度把握に焦点をあてた尺度の開発を行った。そして、「日頃の活動満足度尺度」と「社会活動に関連する過ごし方満足度尺度」という2つの尺度を開発した。

これらの2つの尺度は開発して間もない。そのため、縦断的調査データに基づいて、社会的・生産的活動への関与とこれらの2つの尺度の得点との関連がどのようになっているのかについて、まだ検討できていない。よって、ウェルビーイングの指標にこれらの2つの尺度を取り入れて、社会的・生産的活動への関与がウェルビーイング指標に与える影響も検討していく必要がある。

2. 研究の目的

本研究は、高齢者の社会的・生産的活動に関する追跡調査を実施して縦断的調査データベースを作成し、次の4点を検討することを目的とした。

(1) 高齢者の社会的・生産的活動が、新たに

開発した活動満足度の2つの尺度(「日頃の活動満足度尺度」と「社会活動に関連する過ごし方満足度尺度」)の得点およびその他のウェルビーイング指標に与える影響。

(2) 高齢者の社会的・生産的活動の促進・阻害要因および活動継続要因。

(3) 高齢者の新たな友人・知人の獲得がウェルビーイング指標に与える影響。

(4) 高齢者の新たな友人・知人の獲得に関連する要因。

3. 研究の方法

(1) 調査の対象者と方法

本研究の調査の対象者は、都市部の高齢者(65~79歳)とし、千葉県4市(市川市、船橋市、浦安市、習志野市)を選択した。この千葉県4市それぞれから住民基本台帳の閲覧許可を得て、各市500人を無作為抽出した。千葉県4市の計2,000人を対象に、自記式調査票を用いた郵送調査を行った。

調査の倫理的な配慮に関して、個人の情報や意見がもれないように管理していること、調査協力が困難な場合には返送しないこと、協力が得られる場合には調査票を無記名で返送を依頼したいことなどを、調査協力依頼文書に明記した。

(2) 初回調査

初回調査は、千葉県4市の高齢者2,000人を対象に、2010年8月末に郵送調査を実施した。調査の結果、有効回答数(率)は1,067人(53.4%)であった。

(3) 追跡調査

追跡調査は、997人を対象に、2013年8月末に郵送調査を実施した。この997人は、初回調査の有効回答数1,067人から、代理回答、年齢や性別などの基本的な調査項目に回答がないもの、追跡調査用のID番号が不明のものを除外したものであった。追跡調査の結果、有効回答数(率)は717人(71.9%)であった。この717人から代理回答を除外し、714人を分析対象者とし、縦断的調査データベースを作成した。

(4) 主な調査項目と変数

社会的活動

社会的活動は、「老人クラブ」「町内会・自治会」「趣味の会などの仲間内の活動」の3項目を用いた。各項目について、活動ありに1点、活動なしに0点を付与して加算し、得点化した。この得点をもとに、0点を「低位群」、1点を「中位群」、2点以上を「高位群」とした。そして、低位群を基準カテゴリーとする2つのダミー変数を作成した。

生産的活動

生産的活動は、「ボランティア」「同居の孫などの乳幼児の世話」「同居家族の介護・看病などの世話(乳幼児を除く)」「別居家族・

親戚の孫や乳幼児の世話」「別居家族・親戚の介護・看病・家事・手伝いなどの手助け(乳幼児を除く)」「友人・近隣の乳幼児の世話」「友人・近隣の介護・看病・家事・手伝いなどの手助け(乳幼児を除く)」の7項目を用いた。各項目について、活動ありに1点、活動なしに0点を付与して加算し、得点化した。この得点をもとに、0点を「低位群」、1点を「中位群」、2点以上を「高位群」とした。そして、低位群を基準カテゴリーとする2つのダミー変数を作成した。

なお、生産的な活動には、自宅における「家事」「仕事」という項目も含むことが多いが、本研究では除外した。その主な理由は、「家事」はほとんどの者が行っているためであった。「仕事」については、第1に、高齢期には多くの者が定年などにより退職すること、第2に、仕事をしてきた者は退職し、高齢期を社会的・生産的な活動に関与していかにか充実して過ごしていくのかという、仕事以外の活動への関与という視点が、わが国の超高齢社会において意義があるためであった。

ウェルビーイング

日頃の活動満足度尺度、社会活動に関連する過ごし方満足度尺度、古谷野ら(1990)によるLSIK(Life Satisfaction Index K;生活満足度尺度K)の3種類の尺度を使用した。

新たな友人・知人の獲得

新たな友人・知人の獲得は、それぞれについて、年内に、新たな友人・知人ができたかどうかをたずねた。「できた」という回答を1、「できない」を0とした。なお、知人とは、世間話をするような間柄とし、このような新しい近所づきあいも含む、とした。

(5) 分析方法

社会的・生産的活動がウェルビーイング指標に与える影響を検討する分析は、追跡調査時の各ウェルビーイングの尺度の得点を従属変数、初回調査時の社会的活動または生産的活動、基本的属性等、各ウェルビーイング尺度の得点を独立変数とする重回帰分析とした。基本的属性等は、年齢、性別(男性=1、女性=0)、独居かどうか(独居=1、独居以外=0)、IADL(手段的日常生活動作;自立=1、非自立項目あり=0)、経済的な暮らし向き(大変苦しい=1点~大変ゆとりがある=5点)とした。

社会的・生産的活動の関連要因の分析は、追跡調査時の社会的活動の得点または生産的活動の得点を従属変数、初回調査時の社会的活動の得点または生産的活動の得点、基本属性等、親しい友人・仲間の数、貢献意識を独立変数とする重回帰分析とした。親しい友人・仲間の数は、0人=0点~9人以上=5点とした。貢献意識は、住んでいる地域に貢献する活動をしたいと思うかどうか、人の役に立つ活動をしたいと思うかどうかの2項目を

用意し、それぞれ、とてもそう思う=4点~まったくそう思わない=1点として加算し、得点化した。

社会的・生産的活動の継続要因の分析は、まず、初回調査時に社会的活動をしている者を抽出した。この者のうち、追跡調査時において社会的活動をしている者を活動継続群、していない者を活動非継続群とみなした。そして、活動継続群と活動非継続群の2値を有する変数を従属変数とし、二項ロジスティック回帰分析を行った。独立変数は、基本属性等、親しい友人・仲間の数、貢献意識とした。生産的活動の分析においても、同様の手続きをとって分析した。

新たな友人・知人の獲得がウェルビーイング指標に与える影響の分析は、追跡調査時の各ウェルビーイング指標の得点を従属変数、初回調査時の友人の獲得状況または知人の獲得状況、基本属性等、各ウェルビーイング指標の得点を独立変数とする重回帰分析とした。

新たな友人・知人の獲得に関連する要因の分析は、まず、初回調査時に新たな友人の獲得をしていない者のみを抽出した。そして、この者のうち、追跡調査時において新たな友人を獲得した者と獲得していない者の2値を有する変数を従属変数とし、二項ロジスティック回帰分析を行った。独立変数は、初回調査時の基本属性等、社会的活動、生産的活動とした。新たな知人の獲得に関連する要因の分析においても、同様の手続きをとって分析した。

4. 研究成果

(1) 分析対象者の特性

分析対象者714人の特性(初回調査時)を示す。なお、欠損値があるものについては、欠損値を除いた結果となっている。

平均年齢は、70.9歳、性別は、男性が50.8%、女性が49.2%、家族形態は、独居世帯が11.3%、夫婦のみ世帯が44.4%、その他の世帯が44.3%、IADL(手段的日常生活動作)は、自立が95.7%、非自立項目ありが4.3%、経済的暮らし向きの平均点は3.1点であった。

社会的活動は、低位群が23.9%、中位群が28.9%、高位群が47.3%であった。生産的活動は、低位群が27.1%、中位群が31.6%、高位群が41.3%であった。

年内に新たな友人ができたという回答が24.4%、できないが75.6%であった。年内に新たな知人ができたという回答が25.5%、できないが74.5%であった。

(2) 社会的活動がウェルビーイング指標に与える影響

追跡調査時の日頃の活動満足度得点を従属変数として重回帰分析を行った結果、社会的活動の中位群、高位群ともに有意な正の関連がみられた。

追跡調査時の社会活動に関連する過ごし

方満足度得点を従属変数として重回帰分析を行った結果、社会的活動の中位群、高位群ともに有意な正の関連がみられた。

追跡調査時の LSIK の得点を従属変数として重回帰分析を行った結果、社会的活動の高位群のみに有意な正の関連がみられた。

以上により、概して、社会的活動への関与は、3年後のウェルビーイングに良い効果をもたらすことが示された。また、概して、日頃の活動満足度尺度および社会活動に関連する過ごし方満足度尺度は、社会的活動への関与から得られる主観的な効果を把握しやすい尺度であることが示唆された。

(3) 生産的活動がウェルビーイング指標に与える影響

追跡調査時の日頃の活動満足度得点を従属変数として重回帰分析を行った結果、生産的活動の高位群のみに有意な正の関連がみられた。

追跡調査時の社会活動に関連する過ごし方満足度得点を従属変数として重回帰分析を行った結果、生産的活動の高位群のみに有意な正の関連がみられた。

追跡調査時の LSIK の得点を従属変数として重回帰分析を行った結果、生産的活動に有意な関連はなかった。

以上により、第1に、複数の生産的活動への関与は、3年後の日頃の活動満足度および社会活動に関連する過ごし方満足度に良い効果をもたらすことが示された。第2に、使用するウェルビーイング指標により、生産的活動への関与による主観的な効果が示される場合と示されない場合があるという結果になった。第3に、社会活動に関連する過ごし方満足度尺度を用いた分析では、生産的活動（高位群）との間に比較的強い関連（ $\beta = .124$ ）が示された。4因子で構成される「社会活動に関連する過ごし方満足度尺度」には、「他者・社会への貢献に関する満足度」因子が含まれているため、概して貢献的な活動といえる生産的活動への関与の主観的な効果が反映されやすかったことが考えられる。

(4) 社会的・生産的活動の関連要因および活動継続要因

社会的・生産的活動の状況と経時変化

社会的活動の得点（得点可能範囲：0～3点）の平均値は、初回調査時が1.4点、追跡調査時が1.5点であった。生産的活動の得点（得点可能範囲：0～7点）の平均値は、初回調査時が1.4点、追跡調査時が1.4点であった（表1）。

社会的活動の経年変化に関して、初回調査時に活動ありの者（518人）のうち、追跡調査時においても活動ありの者が471人（90.9%）、活動なしとなった者が47人（9.1%）であった。初回調査時に活動なしの者（164人）については、追跡調査時に活動なしのままの者が101人（61.6%）、活動

ありとなった者が63人（38.4%）となっていた（表2）。

表1 社会的・生産的活動の状況

	平均値	標準偏差
社会的活動 (初回調査時)	1.4	1.0
社会的活動 (追跡調査時)	1.5	1.0
生産的活動 (初回調査時)	1.4	1.3
生産的活動 (追跡調査時)	1.4	1.4

表2 社会的活動の経時変化

	追跡調査時		合計	
	活動あり	活動なし		
初回調査時	活動あり	471 90.9%	47 9.1%	518 100.0%
	活動なし	63 38.4%	101 61.6%	164 100.0%

生産的活動の経年変化に関して、初回調査時に活動ありの者（455人）のうち、追跡調査時においても活動ありの者が389人（85.5%）、活動なしとなった者が66人（14.5%）であった。初回調査時に活動なしの者（172人）については、追跡調査時に活動なしのままの者が113人（65.7%）、活動ありとなった者が59人（34.3%）となっていた（表3）。

表3 生産的活動の経時変化

	追跡調査時		合計	
	活動あり	活動なし		
初回調査時	活動あり	389 85.5%	66 14.5%	455 100.0%
	活動なし	59 34.3%	113 65.7%	172 100.0%

社会的・生産的活動に関連する要因

追跡調査時の社会的活動の得点を従属変数として重回帰分析を行った結果、年齢、親しい友人・仲間の数、貢献意識に有意な関連がみられた。すなわち、高齢になるほど追跡調査時の社会的活動の活発さが低下し、親しい友人・仲間の数が多いほど、貢献意識が高いほど、追跡調査時の社会的活動が活発であった。

追跡調査時の生産的活動の得点を従属変数として重回帰分析を行った結果、独居かどうか、貢献意識に有意な関連がみられた。すなわち、独居よりも独居でないほうが、貢献意識が高いほど、追跡調査時の生産的活動が活発であった。

社会的・生産的活動の継続要因

社会的活動の継続要因を検討した。初回調査時に社会的活動をしていた者（518人）を分析対象とし、追跡調査時における社会的活

動の有無（活動あり 471 人、活動なし 47 人）を従属変数として二項ロジスティック回帰分析を行った。その結果、親しい友人・仲間の数、貢献意識に有意な関連がみられた。すなわち、親しい友人・仲間の数が多いほど、貢献意識が高いほど、追跡調査時においても社会的活動を継続している確率が高かった。

生産的活動の継続要因を検討した。初回調査時に生産的活動をしていた者（455 人）を分析対象とし、追跡調査時における生産的活動の有無（活動あり 389 人、活動なし 66 人）を従属変数として二項ロジスティック回帰分析を行った。その結果、年齢、親しい友人・仲間の数、貢献意識に有意な関連がみられた。すなわち、高齢になるほど追跡調査時に生産的活動をしていない確率が高く、親しい友人・仲間の数が多いほど、貢献意識が高いほど、追跡調査時においても生産的活動を継続している確率が高かった。

(5) 新たな友人・知人の獲得がウェルビーイング指標に与える影響

追跡調査時のウェルビーイングの 3 種類の尺度の得点それぞれを従属変数として重回帰分析を行い、新たな友人の獲得の影響を検討した。その結果、日頃の活動満足度、社会活動に関連する過ごし方満足度それぞれの分析において、新たな友人の獲得に有意な関連が示された。LSIK の分析においては、有意ではなかった。

次に、追跡調査時のウェルビーイングの 3 種類の尺度の得点それぞれを従属変数として重回帰分析を行い、新たな知人の獲得の影響を検討した。その結果、日頃の活動満足度、社会活動に関連する過ごし方満足度それぞれの分析において、新たな知人の獲得に有意な関連が示された。LSIK の分析においては、有意ではなかった。

以上のように、新たな友人を獲得した者、新たな知人を獲得した者は、獲得していない者と比較して、3 年後の日頃の活動満足度得点、社会活動に関連する過ごし方満足度得点がそれぞれ高くなっていった。

(6) 新たな友人・知人の獲得に関連する要因

新たな友人の獲得に関連する要因を検討するため、初回調査時に新たな友人の獲得をしていない者のみを抽出したところ、497 人となった。この 497 人のなかで、追跡調査時に新たな友人ができたと回答した者は 56 人（11.3%）、できない者は 441 人（88.7%）であった。追跡調査時の新たな友人の獲得の有無を従属変数として二項ロジスティック回帰分析を行った結果、有意な関連がみられたのは、社会的活動のみであった。すなわち、社会的活動への関与は、3 年後に友人を獲得する確率を高めることが示唆された。

次に、新たな知人の獲得に関連する要因を検討するため、初回調査時に新たな知人の獲得をしていない者のみを抽出したところ、

458 人となった。この 458 人のなかで、追跡調査時に新たな知人ができたと回答した者は 70 人（15.3%）、できない者は 388 人（84.7%）であった。追跡調査時の新たな知人の獲得の有無を従属変数として二項ロジスティック回帰分析を行った結果、有意な関連がみられたのは、社会的活動の高位群、性別であった。すなわち、社会的活動に関与していない者と比較して複数の社会的活動に関与している者、女性と比較して男性は、3 年後に知人を獲得する確率が高かった。

(7) 本研究の限界

本研究の主な限界を示す。第 1 に、本研究の調査対象者は千葉県 4 市の高齢者であった。本研究の結果が、他の地域の高齢者にもあてはまるかどうかについては言及できない。第 2 に、初回調査の後、追跡調査においても調査協力が得られた高齢者は、比較的元気な者が多かった可能性が考えられる。第 3 に、追跡期間中に、本人に関する状況に大きな変化があった者もいると思われるが、この点については本研究では検討していない。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

岡本秀明、地域における高齢者のインフォーマルな社会的ネットワーク形成に関連する要因 - 友人・知人の獲得に着目して、社会福祉学、査読有、2014、印刷中

岡本秀明、高齢者の社会活動と開発された活動満足度尺度の得点との関連 - 「日頃の活動満足度尺度」と「社会活動に関連する過ごし方満足度尺度」、老年社会科学、査読有、35(1)、2013、3-14

〔学会発表〕(計 4 件)

岡本秀明、都市部在住高齢者のプロダクティブな活動と well-being の関連 - 男女別の検討、日本公衆衛生学会、2013 年 10 月 24 日、三重県総合文化センター（三重県津市）

岡本秀明、地域におけるインフォーマルな社会的ネットワークの形成に関連する要因 - 新たな友人を獲得した高齢者の特性、日本社会福祉学会、2013 年 9 月 21 日、北星学園大学（北海道札幌市）

岡本秀明、地域におけるインフォーマルな社会的ネットワークの形成と主観的效果 - 新たな友人・知人を獲得した高齢者の心理的ウェルビーイング、日本社会福祉学会、2012 年 10 月 20 日、関西学院大学（兵庫県西宮市）

岡本秀明、高齢者の社会活動と新たな 2 つの活動満足度尺度の得点との関連 - 男女別の検討、日本老年社会科学会、2012 年 6 月 9 日、佐久大学（長野県佐久市）

6. 研究組織

(1)研究代表者

岡本 秀明 (OKAMOTO, Hideaki)
和洋女子大学・生活科学系・准教授
研究者番号：30438923